高麗大学校の日本研究の現況と課題
――国際研究交流と国際学術誌を中心として――

鄭　炳浩

はじめに――韓国における日本教育と研究の現状

1945年、韓国が日本の植民地から解放されて以降1965年に日本と国交が正常化されるまで、両国の外交的・文化的・人的交流は言うまでもなく、韓国における日本研究もほぼ空白期に近かったと言わざるを得ない。

韓国における日本関連教育と研究は1961年に初めて日本語科（韓国外国語大学校）が設置されてから公式化したという議論もあるが、この時期の日本教育は実用的言語知識の習得に重点が置かれていた。この意味で、韓国の日本研究は1972年に韓国日本学会、1978年に韓国日語日文学会が設立されてから本格的に軌道に乗ったといえる。一方、1980年代に入るとソウルの高麗大・中央大・漢陽大、地方の釜山大・慶北大・全南大・全北大を含め韓国の多くの大学に日語日文学科が開設され日本教育の底辺拡大とともにその研究の成長期を迎えるようになる。

とりわけ、1990年代には韓国に多くの日本関連学会が新たに設立されており、日本で留学を終えて帰国した日本研究者の数が漸増し韓国の日本研究論文の数量も飛躍的に増加する。韓国では1998年度から韓国研究財団が論文引用索引（KCI）の登載制度を設けている。日本学関係の学会誌としては韓国日本学会の『日本学報』が2002年度に初めて登載誌になって以来現在に至るまで、日本関連学会や大学の日本関連研究所で刊行する20種以上の学術誌が登載誌もしくは登載候補誌となっている。このうち日本の歴史、政治・経済、日本語教育を専門とする3、4つの雑誌以外に、ほとんどの学術誌は日本政治・経済・歴史・思想・文学・語学・文化など日本研究全般を対象としている。この中で2、3の学会を除けばそのほとんどが1990年代に入り創立されたもので、韓国における日本研究が1990年代からいかに活発化したのかがうかがえる。

また、韓国における日本文学研究と関連して注目すべきところとして、様々な大学の日本関連研究所が挙げられるが、この研究所も中央大学日本研究所（1979）、東国大学日本学研究所（1979）を除くとそのほとんどが1990年代ある

いは2000年代に設立された。この日本関連研究所の場合もそのほとんどが日本関連学術誌を刊行しているが、その中でも高麗大学グローバル日本研究院、ソウル大学日本研究所、翰林大学日本研究所は韓国研究財団が研究所育成を目的とした大型プロジェクトを行っており、もっとも活発だといえる。

以上の日本教育・研究機関の概況からわかるように、韓国の日本文学研究も1960、70年代から大学の日本関連学科の設置と学会の設立に伴って徐々に制度化の過程を経て定着した。1980年代に入ると日本研究のための様々な環境が整って日本研究も安定の軌道に乗り、1990年代からは量質ともに飛躍的に発展したといえる[1]。

1. 高麗大学校における日本教育及び研究機関の設立と現況

このような環境の中でも、韓国で比較的に歴史が長く規模の大きいソウル大学校、延世大学校、梨花女子大学校、成均館大学校などには日本関連学科が設けられていない。近代期における日韓の特殊な関係など様々な理由から、いわゆるソウル地域の主要大学と言われるこれらの大学には日本関連の学科が設置されずに、ソウル大学のみに国際大学院に日本研究所が設置されている。その中でも高麗大学校には比較的早い時期である1983年度に日語日文学科が開設されており、大学院の修士・博士課程や日本語教師養成の特殊大学院である教育大学院に日語専攻も設置されている。高麗大学校には日語日文学科が設置された文科大学だけではなく、政経大学、師範大学、国際学部や研究機関であるグローバル日本研究院と亜細亜問題研究所でも日本学を専門とする専任教授が教育や研究に携わっている。

その中でも日本関連教育は主に日語日文学科が担当しており、この学科では単に日本語学や文学だけではなく、日本政治や経済、歴史、文化なども教育している。高麗大学校の国際的研究交流は日本の様々な大学、台湾大学と結んでいる学部生の交換学生制度を除けば、主に大学院の中日語文学科（日本語学・日本語教育専攻、日本文学・文化専攻、中国語学専攻、中国文学専攻、中日比較文化専攻から構成）とBK21Plus中・日言語文化教育・研究事業団を中心に実施されている。まず、中日語文学科はドイツのボン大学、日本の筑波大学と3大学によるTEACH（Transnational European and East Asian Culture and History）プログ

1　鄭炳浩「韓国の日本近現代文学研究と課題」『日本学報』第91輯、2012.5、pp. 35–43参照。

ラムを運営しているが、このプログラムは修士課程2年の中で1年は高麗大学校で外の1年はボン大学と筑波大学で半年ずつ修学し、共同学位を獲得する制度である。

一方、BK21Plus中・日言語文化教育・研究事業団は2006年度に大学院日語日文学科と中語中文学科が合併して中・日語文学科となり、この学科が運営しているプロジェクト事業団である。BK（Brain Korea）21事業は1999年から韓国の教育部が実施する大学院生育成の大型プロジェクトとして、基本的には7年間の事業としてデザインされているが、高麗大学校の中・日語文学科は事業の2期目（2006–2013）からこのプロジェクトに選抜され現在3期目の事業（2013–2020）を営んでいるところである。この事業で大学院生には奨学金と短期・長期の海外研修、国内外の学会参加などを支援しているが、このようなプロジェクトをとおして多くの国際学術交流を行う機会を作り出している。たとえば、中国の北京日本学研究センター、台湾の政治大学日語系、筑波大学とともに11年に渡って毎年定期的な「東アジアの次世代日本研究フォーラム」を開催しているが、このフォーラムでは東アジア三つの地域を巡回し所属教員のシンポジウムと院生の共同発表会を開いている。また、2015年からは立命館大学及び中国／台湾の大学と「ソウル－京都 東アジア次世代研究フォーラム」をも京都とソウルを行き来しながら毎年開いているが、このフォーラムは単に日本学のみならず中国学や韓国学をも含めてこの地域における東アジア研究の交流を目指している。2015年には早稲田大学文学部とも研究交流協定を結んで集中講義やワークショップを開いている。博士課程の院生には日本の様々な大学に訪問研究員として半年から1年間現地で研究する機会をも与えている。

このように国際研究交流は日本を含めて東アジアの様々な地域の研究者と交流を深め、また大学院生が自分の研究テーマをめぐって海外の研究者と議論できる経験が積めるという意味で、ひいてはあえて留学に行かなくても海外の大学で修学しまた学位の取得も可能になるという意味で、所属の大学院生に学問的に非常に大きな刺激を与えていると評価される。

2. 研究機関としての「グローバル日本研究院」の活動

高麗大学校には、このような学科とは別に「グローバル日本研究院」が1998年度に附設されて以来、高麗大学校の日本研究機関としてその役割を果たしている。この機関は1998年度に「日本学研究所」として創立されたが、2007年

度には韓国では初めて日本関連研究所の専用建物である青山・MK 文化館が竣工し、研究所名も「日本研究センター」へと拡大改編した。このような過程で同じく 2007 年度に韓国の政府の研究所育成の大型プロジェクトである「HK 海外地域事業団」に選定された。一方、この事業を行う過程でよりグローバルな眼差しから日本を研究する必要が生じ、2015 年度に「グローバル日本研究院」へと改名され今に至っている。この研究機関の主な活動や業績を示すと次の通りである。

(1)「HK 海外地域事業」の実施

HK（Humanities Korea：人文韓国）事業は、人文学の危機が頻繁に議論されつつあった 2000 年代半ばに韓国社会における人文学の衰弱という現状を打開し人文学研究に活気を取り戻すために、2007 年度から始まった研究所向けの大型プロジェクトである。韓国の日本関連研究所としては初めて2007年に選定されたこの HK 事業は、研究所が一定の研究アジェンダを設定し、共同研究の遂行、専任教授を初め研究人力の養成、国際的学術交流、社会一般への人文学の普及、叢書刊行などを推進する 10 年間のプロジェクトである。高麗大の「グローバル日本研究院」は「日本研究の世界的拠点構築」というアジェンダを通して、国際的なネットワーク作り、共同研究、日本叢書刊行などの事業を行ってきた。韓国には今まで研究所に専任教授を採用する制度がなかったが、このプロジェクトをとおして研究院には現在 5 人の専任教授が所属しそれぞれ活動している。

(2) HK 事業の成果を担う「研究センター」の設置

グローバル日本研究院は、HK 事業を通してそれぞれの分野別に得られた成果に基づき、2015 に四つの研究センターを設けている。日本文学・文化研究者から構成された「日本語文学・文化研究センター」、日本語学・日本語教育研究者から構成された「グローバル言語政策研究センター」、日本歴史思想研究者から構成された「東アジア平和センター」、日本政治・経済・文化研究者から構成された「社会災難・安全研究センター」である。これらの研究センターでは研究院の専任教授と高麗大における日本研究者が共同研究を行い、また様々な研究プロジェクトを遂行している。この外にもグローバル日本研究院は「日本翻訳院」や「情報資料院」という組織をも設けて、外国学研究や紹介に重要な役

割をもつ翻訳事業や図書館運営、資料のデジタル化などを進めている。

(3) 日本学関連学術誌と日本研究叢書の刊行

グローバル日本研究院がHK事業を実施しながらもっとも力を入れた領域は、共同研究と日本研究叢書の刊行である。2006年から始まったこの叢書刊行事業は、日本研究と関わる研究書である「日本学叢書」、日本の名作や主な文学・文化分野の著作を翻訳した「日本名作叢書」、日本研究と関わる基礎資料集である「日本資料叢書」、現代日本の政治・経済・歴史に関する「現代日本叢書」、日本関連事典刊行事業である。この叢書刊行事業は日本の様々な分野を扱い、現時点で300冊以上が刊行されており、研究者のみならず一般読者にも成果を発信している。

また、この叢書以外に韓国学術誌引用索引（KCI）の登載雑誌である査読誌『日本研究』という学術誌を年2回刊行しており、国際誌として『跨境――日本語文学研究』も2014年から定期的に刊行しているが、この学術誌については後で詳しく説明する。

(4) 日本研究デジタル・アーカイブの運営

高麗大学校グローバル日本研究院では、日本専攻の研究者は言うまでもなく、一般人も日本や日本研究と関わる資料と情報を容易く閲覧できるデジタル・アーカイブを構築してきた。日本研究院では膨大なDB検索システムを設けて、約5万件に及ぶ植民地期の朝鮮半島と中国旧満州地域で刊行された日本語文献の全目録、所蔵先やその書誌情報を提供しており、著作権解除済みの原文資料も2642件（約4000枚）を公開している。また、日本研究院で刊行した日本学叢書、現代日本叢書、日本名作叢書、資料叢書などの単行本の目次も公開しており、グローバル日本研究院が刊行する国内専門学術誌『日本研究』、国際専門学術誌『跨境――日本語文学研究』の成果も公開し、その研究内容を世界に向けて発信している。また文字資料に限らず、グローバル日本研究院が実施する特別講演会、コロキウムにおける講演者の講演内容の記録や写真などをもアーカイブに公開し日本研究の普及に努めている。

(5) 日本研究プロジェクトの実施

グローバル日本研究院は、2007年下半期にHK事業の中で唯一の日本研究事

業団に選定され、以後「世界的な日本研究の拠点構築」を目標に多様な共同研究を推進してきた。この事業以後もグローバル日本研究のそれぞれの研究センターでは様々な形の研究プロジェクトを遂行している。例えば、植民地時代朝鮮半島と旧満州地域の日本語文献・資料の目録・目次構築事業、朝鮮半島と旧満州地域の日本伝統詩歌資料集刊行事業、在朝日本人情報人物事典刊行事業、朝鮮総督府機関紙『京城日報』のデータベース構築事業、東アジアにおける災難叙事研究、民間刊行日本語新聞の文学資料目録化事業などがそれにあたる。

3. 国際誌『跨境――日本語文学研究』の刊行とその意義

高麗大グローバル日本研究院の中で、日本語文学・文化研究センターは2014年から「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」とともに、国際誌『跨境――日本語文学研究』（*Border Crossings: The Journal of Japanese-Language Literature Studies*）を刊行している。この雑誌は2014年6月に創刊され、2019年末までに第9号が刊行されており、本文言語は主に日本語で、要旨文は英語の形を取る、年2回刊行する国際査読学術誌である。

(1)「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」の創立と定期的な国際的学術交流

一方、この学術誌を共同で刊行する「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」は日本研究院の提案により日本、中国、台湾、韓国など東アジア地域の日本文学研究者が2年あまりの議論をとおして設立した学術団体である。このフォーラムは「東アジアという視座を持つ、韓国・中国・台湾・日本・香港の日本研究者が集まり、それぞれの国における日本近代文学体験の特殊性及び歴史性を互いに比較しながら研究の地平を拡げ、日本近代文学を東アジアの観点から再構築する企画」であり、「政治、経済、歴史、文化などの分野において、相互に密接な交渉関係を有している」東アジア地域で、「一国中心の国文学研究」を乗り越えて、基本的には「開かれた連帯としての東アジアにおける疎通を促す」（このフォーラムの創立趣旨文）という考え方に基づいている。

このフォーラムは2013年10月ソウルの高麗大学校で「東アジアにおける雑誌の流通と植民地文学」をテーマとした創立大会を開いて以後、第2回「大衆化社会と日本文学」（中国北京師範大学、2014年10月）、第3回「翻訳文化と日本文学」（台湾・輔仁大学、2015年11月）、第4回「集団の記憶、個人の記憶」（日本・名古屋大学、2016年10月）、第5回「言語圏とディアスポラ文学」（韓国・高

麗大学、東国大学、2017年10月)、第6回「「レンタル」と東アジア近現代文化」(中国・上海復旦大学、2018年10月)国際学術大会をそれぞれ開催しており、2019年10月には第7回大会を台湾の政治大学と東呉大学で「海洋文化と東アジア文化」というテーマで開催した。

このように、このフォーラムは一定のテーマを決め、日本、韓国、中国、台湾を毎年巡回しながら国際学術大会を開催するだけではなく、東アジアの大学院生を中心とした若手研究者フォーラムも同時に設け、東アジアの次世代日本研究者を共に育成していくことにも気を配っている。これ以後はさらに視野を広げて2020年の第8回フォーラムはインドネシアで、2021年の第9回フォーラムはオーストラリアで開催し、このフォーラムを単に東アジア地域にとどまらず、アジア・太平洋地域へと広げていくことを目指している。

(2) 国際誌『跨境――日本語文学研究』の創刊

この「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」が創立された際、問題意識の一つは、いかにして東アジアの日本文学研究者が持続的な学術交流を続けるかであった。この地域において日本研究の分野でも学術交流がかなり増えており様々なかたちの学術大会が頻繁に開催されていることも事実である。しかし、その交流は一回性の学術発表会にとどまる場合がほとんどであり、素晴らしい問題意識のある内容があってもそれを外部に向けて発信するケースは極めて稀であった。「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」もそのような形になれば、せっかく軌道に乗ったその試みもどこまで持続できるのかは相当疑問であった。当初、そのフォーラムで発表されたものを単行本や論文集の形で出版しようという議論もあったが、地域別に事情が異なるので多少無理だということが分かった。

そこで、「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」を通して持続的な学術交流を活性化させ、またその成果を東アジア地域、ひいては世界各地の日本研究者に発信するため、このフォーラムと高麗大グローバル日本研究院はこの分野初めての国際査読誌である『跨境――日本語文学研究』を刊行することになったのである。

『跨境――日本語文学研究』は編集委員と査読委員から構成されているが、このメンバーには日本、中国、台湾、韓国など東アジア研究者は勿論、アメリカ・ドイツ・フランス、オーストラリア、イギリス、カナダなど欧米の日本研究者、

インドネシアなど東南アジアの日本研究者、ブラジルなど南米の日本研究者が参加し、編集・査読を共同で進行させている。特に、この学術誌は専用のウェブサイトを構築してその内容を公開しており、また雑誌は日本の笠間書院をとおして委託販売されている。

韓国の場合は韓国内の学術誌が韓国学術誌引用索引システム（KCI）登載制度を実施しており、また大学もこのシステムを積極的に受け入れて大学の業績評価に利用している。このため、このシステムに登載されていない学術誌の論文は主な評価から排除される。海外の学術誌は人文学の場合アメリカのClarivate Analyticsが構築した国際学術論文引用索引データベースであるA&HCI（Arts and Humanities Citation Index）やElsevier出版社の国際誌引用索引データベース、Scopusに登載されたもののみ、業績評価の主な対象となる。このような現象は中国や台湾でも同様のようである。そのため、グローバル日本研究院でも『跨境――日本語文学研究』がそのような現状に対応できるように、英語論文でなくてもインデックスできるScopusに登載するための様々な努力をしているところである。

結論――これからの課題

韓国では2010年代から日本関連学科の人気が急速に下落している。勿論、人文学関連学科の人気の低迷は最近になって浮上した現象でもないが、その中でも最近数年間韓国における「日語日文学科」の人気下落は著しかったと言わざるを得ない。1980年代から2000年代まで韓国の日本教育機関と研究機関が著しく拡大したことを振り返ってみればまさに隔世の感がある現象である。

このような影響もあって、韓国には最近どの分野をも問わずに日本研究を目指す大学院生の数が減っており、大学院に入っても以前のように日本に留学に行こうとはしない。この現象は韓国の大学院教育がある程度充実したという事実を表すことでもあるが、前で見たように韓国の大学が評価する主な研究業績の中に日本の学術誌が入っていないという事情とも関係がある。

このような意味で、韓国の日本教育と研究は以前よりも国際的学術交流がもっと重要となるといえる。大学院生は日本などに短期・長期研修の機会を模索し、この機関で研究のための十分な資料を集める必要があり、または国際的学会や共同発表会に参加し様々な地域の研究者と討論する過程で自分の研究の立脚点を確かめる必要がある。また、最近韓国における日本学の人気が落ちたと

しても、同じ東アジアの隣国としてその研究の必要性や需要がこれからも続くというのは当然のことである。韓国の日本学分野では2000年代以後日本を含めて、東アジア、あるいは世界の様々な地域と国際的交流が非常に増えてきた。これからはこのような国際交流を単発的な行事で終えずに、いかにして持続的な交流へと繋げるかが非常に重要だと考えられる。このような国際交流に次世代研究者の軸である大学院生をも交えて、持続的な交流を増やすことで上記の問題もある程度乗り越えていけるであろう。

（チョン ビョンホ　韓国・高麗大学校日語日文学科 教授）